

次に、小稿の分析をまとめておく。

	むすぶ	系	結	つなぐ	接	連
ひも状のもの同士の結び目のある結合	○	○	○	○	○	○
二点の連結（動作的）	○	×	×	○	○	○
〃（非動作的）	○	×	×	○	×	×
結び目のない結合	×	×	×	○	○	○
非ひも状のもの同士の結合	×	×	×	○	○	○
ひも状のものと非ひも状のものとの結合	○	○	○	○	○	○
整った形にまとめる	○	○	○	×	×	×

言語経歴：1953年4月から1983年2月まで中

国

1984年4月まで横浜市神奈川区

現在東京都目黒区

（東京都立大学大学院学生）

## 山口県長門方言切断動詞の意味分析

——ツムに連なる動词语彙——

藤田勝良

### 1. はじめに

共通語の切断動詞「つむ」は、柴田編1976の指摘するように成長物を切断対象とする。ただし、成長物といってもそのほとんどは植物である。柴田編1976により、その切断対象を列挙すると次のようなものがある。

「桑の葉」「レンゲ草」「花」「セリ」「ヨモギ」「綿の花」「苳」「羊の毛」「葡萄の房」「木の芽」

一方、全国方言の実態を記した辞書類の記述をみると西部方言のうちに、「つむ」が共通語に比べより広い対象に用いられる地域のあることがわかる。たとえば『日本国語大辞典』の、つむ【摘・採・抓】の方言の項には次のようにある。

②髪を刈る。散髪する。兵庫県赤穂郡・広島県高田郡・熊本県下益郡

③はさみで切る。石見「紙をつむ」「髪の毛をつむ」「爪をつむ」徳島県「髪をつむ」「爪をつむ」愛媛県「紙をつむ」「髪をつむ」「爪をつむ」高知県「夜つめをつむものではない」

また、筆者が1983、1984両年に東京在住の若年層を主な調査対象として行なった調査でもこのことは次のように確められた。

(表1)

話者	対象			
	髪 の 毛	爪	紙	糸
北海道札幌市(1962)6~18	×	×	×	×
岩手県盛岡市(1962)0~18	×	×	×	×
埼玉県朝霞市(1958)3~現在	×	×	×	×
東京都豊島区(1962)0~現在	×	×	×	×
岐阜県美濃加茂市(1962)0~18	×	×	×	×
愛知県知立市(1958)0~23	×	×	×	×
福井県武生市(1954)0~18	×	×	×	×
徳島県石井町(1955)0~18	×	×	×	×
愛媛県松山市(1959)4~18	○	○	×	×
高知県高知市(1964)0~18	○	○	○	×
広島県五日市町(1960)0~現在	○	○	×	×
山口県長門市(1958)0~18	○	○	○	○
福岡県久留米市(1963)0~18	?	○	×	×

注：話者の欄は出身地、生年、居住期間の順に記す。

本稿ではこのように「つむ」の切断対象の広がりがみられる西部方言の中から山口県長門方言をとりあげ、ツムを中心とした切断動词语彙の意味の分析記述を行

なう。

## 2. ツムと共通するヲ格名詞をとる切断動詞

長門方言のツムは、「対象物を切断する」という意味的な枠の中で、カル・チギル・ムシル・モグの各語と類義的な関係を結んでいると考えられ、それぞれとヲ格名詞と重なりをみせる。また一方、ツムと類義関係にある各語相互もカル・モグ、カル・ムシルの場合を除いてヲ格に共通にたつ名詞を有している。次のとおりである。

(表2)

対象言語	草	葎	木の葉	髪	爪	鳥羽の根	紙	布	糸	着物袖	バン
ツム	○	○	○	○	○		○	○	○		
カル	○			○							
チギル	○		○			○	○	○	○	○	○
ムシル	○		○	○		○					○
モグ		○				○				○	

以下、本稿では、四語と比較対照してツムの意味特徴を分析記述し、また四語についても併せて分析記述を行なう。ただし、比較対照する語彙はあくまでもツムと類義関係にあると考えられるものに限られているからツムについてはある程度充分な分析がなされ得るものの、意味特徴の多様な動詞についてはまた別の動詞語彙との比較分析が必要である。たとえばムシルのような動詞については更にハグヤコサグ(注2)のような剥離動詞語彙と比較対照していかなければならないことはことわっておかなければならない。

## 3. 分析

### 3.1. 視点

まず切断に於ける視点が切断をうける「本体」と切り離される「分離部分」のどちらにあるかについて述べる。これがはっきりしているのはモグで、モグのヲ格にたつものは、「柿」「茄子」「葎」「ボタン」など独立した形状をもった「分離部分」に限られており、視点は「分離部分」におかれていることがわかる。カルは後述するように地面や生体に生える成長物をヲ格にとるが、これらについては、i) 地面や生体から切断をうけて取り去られる分離部分、ii) 切断をうける本体、という二通りの解釈が一応成立する。しかし次例(1)に示すように、当方言ではいったん切断された成長物に再び切断を加える場合にカルを用いることはできないから、カルは地面や生体に成長物が生えている姿全体を

とらえ、そこから成長物を切断し取り去ることを表示するものと考えられる。したがってカルのヲ格に来る成長物は「分離部分」とみることができよう。

(1) \*トッテ キタ<sup>(注3)</sup> クサー<sup>(注3)</sup> カル (取って来た草を刈る)

また、成長物を切断する場合には、その先端やまん中ではなく、つけ根から切断するのではないといいたくいが、これも成長物が切断をうける「本体」としてではなく、分離部分としてとらえられていることを裏づけるものと考えられる。

(2)?? クサノ サキュー カル (草の先を刈る)

(3)?? クサー マンナカカラ カル (草をまん中から刈る)

(4) クサー ネモトカラ カル (草を根元から刈る)

ただし、切断に於ける視点ということになると、カルは成長物が生えている地面や生体の部位をヲ格にとって次のように表現するいわゆる場所格表現が可能であるから、特に「分離部分」に視点が固定されているわけではないと考えられる。

(5) ター カル (田を刈る)

(6) アタマー カル (頭を刈る)

次にツムについていえば、ツムのヲ格には「本体」と「分離部分」の二通りのものが表示され、視点は「本体」「分離部分」いずれにもおかれ得る語であると解される。

(7) カミュー ツム (紙を切る)

(8) キノ メヨー ツム (木の芽をつむ)

(7)のヲ格で表示されたものは切断にあう本体、(8)のヲ格で表示されたものは本体から切り離される部分と考えることができよう。ツムは「葎」「お茶の葉」「葡萄」「木の芽」など植物が対象の場合には「分離部分」をヲ格にとることが多く、「糸」「布」など無生物の場合には「本体」をヲ格にとることが多い。チギルはどうであろうか。チギルでも「紙」のような「本体」、「葉」のような「分離部分」のいずれもがヲ格にたち、視点はやはりいずれにもおかれ得ると解される。「葉」のような分離部分をさらに本体とみなした次のような用法のあることもこれを裏づけている。

(9) ハッパー マンナカカラ チギル (葉をまん中からちぎる)

最後にムシルについていえば、ムシルことによって分離されるのは後述するように面的に密着している部分であるが、ヲ格には(10)のようにこの分離部分が表示されることもあれば、(11)のように本体の表示されるこ

ともある。

(10) ハニョー ムシル(羽をむしる)

(11) パンヲ ムシル(パンをむしる)

このことからムシルも視点は「本体」「分離部分」いずれにおかれ得ることがわかる。

### 3.2. 成長物

先述したようにカルカの分離部分は「草」「稲」「枝」「竹」などの植物、あるいは生体に生える「髪」など成長物に限定されている。(ただし、「苔」や「すね毛」,「木」などは分離部分としてヲ格にとることができないが、これはカルカの切断の仕方に関する特徴によると考えられる。3.6., 3.7.参照)。ツムもカル同様分離部分として「葍」や「爪」などの成長物をとることができる。しかし、それに限定されず、次のような場合には非成長物である「紙」や「糸」の一部が分離部分となる。この点、共通語ではカル同様、成長物に限定されており、当方言と共通語の顕著な相違点として注目される。

(12) カミノ スミュー ツム(紙の隅をつむ)

(13) イトノ アケアー トコロー ツム(糸の赤い部分をつむ)

チギル, ムシル, モグもツム同様、分離部分となるものには成長物, 非成長物両方があり、分離部分が成長物かどうかということは非関与的であると考えられる。たとえばチギルは「葉(の一部)」「布の一部」、ムシルは「草(の一部)」「パンの一部」、モグは「茄子」「ボタン」を分離部分とすることができる。

### 3.3. 本体, 分離部分の形状

すでに述べたようにモグの切断における視点は分離部分におかれているが、この分離部分は「柿」「梨」「西瓜」「胡瓜」のように本体とは独立の立体的な形状をしているものでなければならない。たとえば「葉」や「髪の毛」に対してモグを用いることはできない。

(14) \*ハッパー モグ(葉をもぐ)

(15) \*カミュー モグ(髪をもぐ)

ただし、「鳥の翼」や「蛇の羽根」にモグを用いることは可能である。これは「翼」や「羽根」が下肢などと同じように運動上の重要な機能を有していることと関連するものと思われる。

(16) トリノ ハネョー モグ(鳥の翼をもぐ)

(17) アブノ ハネョー モグ(蛇の羽根をもぐ)

チギルは分離部分がヲ格にくる場合、モグとは逆に、平面的なものや線的なものは可能であるが立体的な形状のものとはとることができない。

(18) \*ナスビュー ツルカラ チギル(茄子を蔓からちぎる)

(19) ハッパー イチメアー チギッテクル(葉を一枚ちぎってくる)

ただし、ヲ格に表示されるものが「本体」である場合は、次のように立体的な形状のものも可能である。

(20) モチュー フタツィー チギル(餅を二つにちぎる)

カルカのヲ格には場所格表現を除いて分離部分である成長物がくるが、その形状は「髪」「草」「枝」など線状のものに限られる。「葡萄」や「柿」などは分離部分としてヲ格にとることはできない。

(21) \*カキュー カル(柿を刈る)

(22) エダー カル(枝を刈る)

なお、「草」や「髪の毛」のように柔らかいものである場合は、これらが密集した状態でなければならないが、これは後述するカルカの切断のしかたに関する特徴から余剰的に導かれることである。

(23) \*カミュー イッポン カル(髪を一本刈る)

ツムはどうであろうか。ツムは次のように分離部分は立体的、平面的、線的なものいずれであっても可能であり、形状に特に制限はない。

(24) イチゴー ツム(葍をつむ)

(25) ハッパー ツム(葉をつむ)

(26) カミュー ツム(髪をつむ)

ところが本体についてはツムは立体的なものは不可である。

(27) \*イチゴノ サキュー ツム(葍の先をつむ)

(28) ハッパノ サキュー ツム(葉の先をつむ)

(29) カミノ サキュー ツム(髪の毛の先をつむ)

これは後述するツムの「切断手段」「切断のしかた」「切断面」についての特徴によるものと考えられる。最後にムシルについていうと、ムシルは分離部分の形状については次のように制限はない。

(30) サカナノ ミュー ムシル(魚の身をむしる)

(31) コキョー ムシル(苔をむしる)

(32) クサー ムシル(草をむしる)

一方、本体は立体的な形状のものに限られており、平面的なものや線的なものはとらない。しかしこれは、i) 次節に述べるようにムシルの分離部分は「本体に面的に密着しているもの」でなければならないが、このような分離部分を有する平面的、線的な本体がほとんどないこと、ii) 「草」や「苔」の生えた地面はi)の条件を満たすが、これも次節に述べるように密着されている本体が密着している分離部分と連続的でない

場合には原則としてその本体をヲ格にとらないために不可である、という事情によるものであると考えられる。

### 3.4. 分離部分の面的密着性

これまでも触れてきたが、ムシルの分離部分は「苔」「庭の草」「綿毛」「髪の毛」「鳥の羽」など本体に面的に密着しているものである。次のように本体に面的に密着していないものは分離部分としてとることができない。

(33) キューリユー ムシル (胡瓜をむしる)

(34) アブノ ハネヨー ムシル (蛇の羽根をむしる)

なお、「パン」などは分離部分と本体が連続的であるため、分離部分と本体をあわせた全体がヲ格に表示されるが、分離部分が本体と独立である場合にはヲ格には分離部分のみが表示可能であり、密着されている本体の方はヲ格にとることができない。

(35) パンヲ ムシル (パンをむしる)

(36) アタマー ムシル (頭をむしる)

一方、カルの見離部分は「庭の草」「髪の毛」「羊の毛」などムシルと重複するものもあるが、必ずしも面的に密着しているものばかりではない。たとえば「枝」や「竹」など硬質のものの場合にはこれらが本体である木や地面に密集して生えているわけではない。次の例文は適格な文である。

(37) タキヨー イッポン カル (竹を一本刈る)

なおカルはムシルと異なり、分離部分が面的に密着して生えているものの場合、(5)(6)のようにそれが生えている本体をヲ格にとることの可能な場合が多い。ツムはどうだろうか。ツムはカル同様いろいろな成長物をヲ格にとるが、それらが一面に密着して生えているものである場合には用いにくい。たとえば「草」であればカルのように一面に密集して生い茂っている雑草ではなく、(後述するように)比較的小さな草の単体をツムなのである。しかし、これは後述するツムの切断手段、切断のしかたに関する特徴からくる傾向的な制限であると考えられ、たとえば「髪」の場合には「鋏」を切断手段とすればツムを用いることは可能である。

(38) カミュー ハサミテ ツム (髪を鋏でつむ)

チギルは「草」「紙」「葉」「餅」「袖」などをヲ格にとるが、この場合に分離されるものは面的に密着しているものとの解釈は受けられないものである。また次のようにチギル、ムシルともに「鳥の羽根」をヲ格にとり得るが、(40)の羽根は小さな羽毛の集まりという意味になる

のに対し、(39)の羽根は一枚の翼、あるいは一枚の羽毛と解釈されるのが一般的である。これらはチギルが分離部分として面的に密着しているものをとり得ないことを示すものと考えられる。

(39) トリノ ハネヨー チギル (鳥の羽根をちぎる)

(40) トリノ ハネヨー ムシル (鳥の羽根をむしる)

モグは既に述べたように分離部分は本体と独立の立体的な形状としているものでなければならない。したがって「庭の草」や「苔」など本体に面的に密着しているものを分離部分とすることはできない。

(41) コケヨー モグ (苔をもぐ)

### 3.5. 分離部分の大きさ

次に分離部分の大きさについて述べる。分離部分の大きさについて一定の傾向が見られるのはツムである。これまで述べてきたようにツムの分離部分には植物や生体に生える成長物、「紙」や「布」などの非成長物の一部分があるが概して小さいもの、小部分である。たとえば植物についていえば、「わらび」「つくし」「よもぎ」「れんげ」など小ぶりのものが多く、生体に生える爪は伸びた先端がツムとられる。また非成長物である「紙」や「布」では分離部分は小面積でないツムは使にくい。次のようにいうのは不自然である。

(42) オーキナ カミュー ハンブンニ ツム (大きな紙を半分につむ)

ただし、「糸」や「髪」のように線状のものは分離部分は必ずしも小部分でなくてもよい。

(43) ナゲター イトノ マンナカー ツム (長い糸のまん中をつむ)

また植物では「葡萄の房」のようにやや大きいものもツムとることができるから、分離部分の小ささはあくまで傾向的な特徴として記述すべきであると考えられる。カルの見離部分は既に述べたように線状の成長物であるが、その大きさには基本的に制限はない。たとえば「髪の毛」のように比較的小さく細いものから「竹」のように比較的大きく太いものまで可能である。ただし「竹」もあまり太いものになるとカルは使えなくなるが、これは後述する切断のしかたに関する特徴によるものであると考えられる。

(44) フター タケヨー カル (太い竹を刈る)

チギルもカル同様、分離部分の大きさに制限はない。たとえば小さなパンの端を少しチギってもよいし、大きな(たとえばフランスパンのような)パンを真ん中

から二つにチギってもよい。モグ、ムシルはともにその切断手段についての特徴と関連して分離部分の大きさが余剰的に規定されている。モグの切断手段は次節に述べるように「手」「指」であり、分離部分はこれをつかめる程度の大きさでなければならない。最も小さいものは手の指でつかまれる「ボタン」のようなものであり、最も大きいものは両手でつかまれる「西瓜」や「カボチャ」のようなものである。なお東京語では普通片手でつかまれるものが最も大きなものであると思われるが、この点も方言と東京語の相違として注目される。ムシルの切断手段も「手」「指」であり、分離部分は「鶏の羽根」「毛玉」「苔」など「手」「指」でつかめる程度の大きさのもので構成されていなければならない。

### 3.6. 切断手段

次に各語の切断手段を比較してみよう。まずツムについていえば、切断手段は「鋏」「手」「指」といった対象の“はさみつけ”を前提とするものである。「庖丁」や「カッターナイフ」のような“押しつけ”を前提とするもの、あるいは「鎌」のように刃先を対象に勢いよくあてることを前提とするものは基本的に切断手段とすることはできない。また「鋏」と「手」「指」は対象によって使い分けられていて、植物に対しては基本的に「手」「指」が用いられるが生体に生える「爪」や「髪」それに「紙」「布」「糸」のような非成長物に対しては「鋏」が用いられる。ただし、「菊」のように茎のやや太い植物に対して剪定鋏を用いてツムことは可能である。しかし逆に植物以外のものを「手」「指」を用いてツムことはできない。次のとおりである。

(45) カミュー ハサミデ ツム (紙を鋏でつむ)

(46) \*カミュー テデ ツム (紙を手でつむ)

(47) キリョー ハサミデ ツム (布を鋏でつむ)

(48) \*キリョー テデ ツム (布を手でつむ)

このような切断対象による切断手段の使い分けはツムの切断面についての特徴と関連すると思われるが、この点については3.9.で改めて述べる。なお、次節で述べるように植物を手でツム際、「庖丁」などを補助的に用いることは可能である。カルはどうであろうか。カルは切断手段は「鎌」「鋏」「手斧」であり、いずれも刃先を勢いよくあてることによって対象を切断する刃物である。ツム同様、「庖丁」や「カッターナイフ」「鋸」のように“押しつけ”を前提とする刃物はとり得ない。また「手」や「指」も不可である。

(49) タキョー テオノデ カル(竹を手斧で刈る)

(50) `タキョー ノコギリデ カル(竹を鋸で刈る)  
一方、チギルは基本的には「手」「指」が切断手段であり、刃物は切断手段としてとり得ない。

(51) `カミュー ハサミデ チギル (紙を鋏でちぎる)

(52) カミュー テデ チギル (紙を手でちぎる)  
「手」「指」の他には次のような場合に「歯」も切断手段となる。

(53) カシノ フクロー ハデ チギル (菓子の袋を歯でちぎる)

モグも基本的には「手」「指」が切断手段である。「ボタン」のように比較的小さい分離部分には「指」が用いられるが、「柿」や「胡瓜」に対しては「手」が用いられ、「大きな西瓜」になると「両手」が用いられることもある。ただチギルとは異なり「歯」は切断手段とされない。なお、次のように言うこともあるが、これは切断された分離部分の形状に注目してモグをあてはめた表現ではないかと考えられ、本稿では一応例外的なものとして扱いたい。

(54) ユビュー デンキノコデ モューダ (指を電気鋸でもいだ)

最後にムシルの切断手段についていえば、これも「手」「指」に限定されており、その他の身体部位、あるいは刃物を切断手段とすることはできない。またモグの(54)に相当するような表現もない。

(55) ニワノ クサー テデ ムシル (庭の草を手でむしる)

(56) \*ニワノ クサー カマデ ムシル (庭の草を鎌でむしる)

### 3.7. 切断のしかた

各語の切断のしかたを考えるには前節にみた切断手段が参考になる。ツムの切断手段は「鋏」「手」「指」である。これらは対象を切断する過程で“はさみつけ”を行なうことで共通している。次に示すように「鋏」による場合には“はさみつけ”に“ひっぱり”や“ひねり”を加える必要があるが、いずれの切断手段による場合も対象のはさみつけが行なわれる点では一致している。

(57) イトー ハサミデ ツム (糸を鋏でつむ)

(58) ツクシュー テデ ヒツパッチェ ツム (土筆を手でひっぱってつむ)

(59) ゼンメアー ユビデ ヒネッテ ツム (薔薇を指でひねってつむ)

一方、「鎌」「庖丁」「ナイフ」のようにもともと“は

さみつけ”を前提としないものは、次の(60)のように、刃の腹と親指との間に対象をはさみつけるようにして用いるのであれば可能であるが、用い方をそのように限定しない場合には不可である。

(60) セリユー オヤユビト ホーチョーデ ハサミツケテ ツム (芹を親指と庖丁ではさみつけてつむ)

(61) セリユー ホーチョーデ ツム (芹を庖丁でつむ)

以上よりツムについては“はさみつけ”が切断のしかたの特徴と考えられる。<sup>(注4)</sup>ところで、ツムが鋏を使って対象をはさみつける場合、鋏の柄は手の指で操作される形状のものでなければならない。たとえば柄を一本々手で握ることになる長い剪定鋏はツムの切断手段として表示することはできない。

(62) センターバサミノ エノ ナゲアーホデ ハー ツム (剪定鋏の柄の長いので葉をつむ)

これは、ツムの“はさみつけ”が、あくまでも手先の加力によるものであることを示すと考えられる。先にも述べたとおりカルの切断手段は「鎌」「鋏」「手斧」など刃先を勢いよくあてることによって対象を切断する刃物に限定されており、「庖丁」や「カッターナイフ」「鋸」のように刃先を押しつけて加力する刃物は不可である。ここから、カルの切断の仕方の特徴として“刃先を勢いよくあてる”を考察することができる。この特徴で、まず、3.3.で述べた柔らかい対象は必ず密集した状態でなければならないという点は説明できよう。すなわち、このように勢いよくあてられる刃先に対しては、それにみあう抵抗が対象になければならないということである。分離部分の形状は線状であるから、比較的硬度の高いものであれば単体であっても勢いのついた刃先をさし向ける意味があるが、柔らかいものになると単体にわざわざ勢いのついた刃物をさし向けることは考えられず、また、刃先を受けとめるのもむずかしくなると考えられるのである。ところでカルのこの“刃先の勢いよくあてる”切断動作は繰り返してあてはならない。次のようにカルは繰り返しの加力を表示する語とは共起できない。

(63) テオノー ナンケアーモ フリオロシテ エゲー カル (手斧を何回も振りおろして枝を刈る)

3.6.で述べたように「竹」も太いものになってくるとカルは使えなくなるが、これも実際にこのような太いものを切断するには通常繰り返しの加力が必要になるためと考えられる。「木」もカルのヲ格に立つことは

できないが、これも同様の理由によるものと考えられる。

(64) キュー カル (木を刈る)

チギルはどうだろうか。チギルの切断手段は、「手」「指」「歯」の身体部位であるが、これらを用いた切断のしかたに特に制約はみられない。たとえば「紙」を切断する場合には、両端を持ってひっぱってチギってもよいし、たがいちがいに加力して裂くようにしてチギってもよい。「ノートの紙」や「葉」であれば一端を持ってひっぱってもよい。また「パン」などは両手でねじってチギってもよい。一方、モグは「手」「指」を切断手段とするが、ツムのように“はさみつけ”を行なうのではなく、分離部分をこれらでつかんでひっぱるのが動作特徴と考えられる。次のように毬があつて手でつかむことの難しい「栗」はヲ格に來ない。また「木の枝」のように手でつかむことはできてもひっぱって切断し去ることの難しいものもヲ格に來ない。<sup>(注5)</sup>

(65) クリュウ モグ (栗をもぐ)

(66) キノ エゲー モグ (木の枝をもぐ)

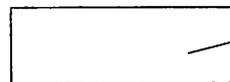
ムシルもモグ同様、「手」「指」で分離部分をつかんでひっぱるが、分離部分は本体に面的に密着しているものであるから、つかむのは通常その一部分である。ただし、一部分とはいっても、たとえば「鳥の羽根」の場合一本だけムシルというのは不可である。面的に密着している分離部分の構成要素のいくつかを一緒につかんでひっぱるのでなければならない。

(67) トリノ ハネノ シレーソー イッポン ムシル (鳥の羽根の白いのを一本むしる)

### 3.8. 分離

ツムとチギルはともに「紙」「布」を切断対象とするが、切断対象の完全な分離をあらわすかどうかで相異なる。チギルでは切断対象が分離するとは限らないが、ツムにあっては切断対象の分離は必須である。たとえば、チギルは図1のような分離に至らない切断もあらわし得るが、ツムはこのような切断はあらわし得ない。<sup>(注6)</sup>この点に関してカル、ムシル、モグはいずれもツムと同じであり、対象の分離は必須である。

図1



### 3.9. 切断部の状態

最後に切断部の状態について述べる。ツムとチギル

は「紙」「布」の他「草」や「花」も共通にヲ格にとり得る。しかし、その切断部は、ツムが「手」「指」による場合も含めて乱れていないのに対し、チギルでは常にギザギザした大小さまざまの出入りが切断部に認められる。たとえば植物が切断対象のとき、ともに「手」を切断手段としてとり得るが、(68)では切断部の乱れは感じられないのに対して、(69)では切断部の乱れが強く感じられる。

(68) クサー テデ ツム (草を手でつむ)

(69) クサー テデ チギル (草を手でちぎる)

また、「手」や「指」によって切断したとき切断部の乱れが目立つ「紙」や「布」のような面的なものには、ツムは「鋏」しか用いることができない。一方、チギルは常に「手」「指」あるいは「歯」の身体部位が用いられ、切断面は乱れている。「鋏」や「カッターナイフ」で綺麗に切断された紙に対して、カミガ キレーニチギツチャル(紙が綺麗にちぎってある)とはいえない。ムシルもチギル同様、切断部は乱れた状態である。たとえば草をムシったのであればそのあとに多数のふぞろいでギザギザした切断痕をみせる草が残っていることが意識される。このようなチギル、ムシルの切断部の状態はその手段が「指」「手」であること(チギルはさらに「歯」も)と密接な関連があると考えられる。しかし、ツムとチギルの対照からわかるように、同じように「指」を用いてひっぱって切断してもその切断面は必ずしも一義的に乱れたものとして意識されるわけではない。そこで本稿ではそれぞれの手段と切断部の状態を一応分けて記述する。モグはどうであろうか。モグもチギル、ムシル同様、「指」「手」が切断手段として用いられ、実際の切断部も乱れていることが多いが、語感としてはこれら二語のように乱れているという感じはない。また逆にツムのように乱れていないという感じもない。この語感には、1)「梨」などを実際には鋏で切断した場合にも文中に切断手段を明示しなければ、その分離部分の形状の特徴に注目することで(68)のようにいうことが可能であること、2)「鳥の翼」のように切断部の乱れがはっきりするものに対して(70)のように手でつかんでモグということが可能であることから裏づけられ、モグは切断部については特に指定のない語であるとみることができる。

(68) ナシュウ モグ (梨をもぐ)

(69) \*ナシュウ ハサミデ モグ (梨を鋏でもぐ)

(70) トリノ ハネヨウ テデ モグ (鳥の翼を手でもぐ)

最後にカルについていえば、カルは切断手段は刃物

に限定されており、またその切断のしかたも刃先を対象に勢いよくあてるのであるから当然切断部は整ったものとなる。これはムシル、チギルとは違って余剰的に導かれることである。

#### 4. まとめ

以上の分析をまとめると次のようになる。傾向的な特徴と考えられるものは括弧内に示す。

ツム……………対象を、手先に力を加え、鋏、手、指のいずれかではさみつけ切断し分離する。ただし“はさみつけ”は必ずしも切断の決定的要因であるとは限らない。切断部は乱れていない。(分離部分は通常小ぶりのものである。)

カル……………生体や地面に生えている線状の成長物を鎌や手斧などの刃物の刃先を勢いよくあてることによって1回で切断分離する。

チギル……………対象を手や指あるいは歯のいずれかの身体部位を用いて切断する。ただし切断の結果対象が分離するとは限らない。切断部は乱れている。

ムシル……………面的に密着して覆っている部分と覆われている部分から成る対象の覆っている部分の構成要素をいくつか一緒に手または指でつかんでひっぱって切断分離する。切断部は乱れている。

モグ……………対象のうちで独立した立体的な形状を有する部分を手または指でつかんでひっぱって対象から切断分離する。切断に於ける視点は分離される独立的な部分にある。

<注1> この他、東條編1951、平山編1979にも同様の記述がみえる。

<注2> コサグは「けずりとる」に近い意味を有していると観察される動詞。「飯櫃の底の飯」などに対して用いられる。

<注3> 当方言の格助詞「ヲ」は次の原則に従って名詞と融合する。

(名詞の末尾)

(融合形)

-Ci	……………	-CjoR・-CjuR
-Ce	……………	-CjoR
-Ca	……………	-CaR
-Co	……………	-CoR
-Cu	……………	-CuR

—CeR…………… —CeR'o

—N …………… —N'o

<注4> 畑1952では、ツムの意味が「指先でつねる」と記されており、当時の上伊那方言ではこの特徴が中心的特徴となっている。

<注5> ただし「指」や「足」は可能である。「木の枝」とどこかに質的相違があると考えられる。この点はさらに検討を要する。

<注6> ただし切断線が乱れているかどうかはここでは問わないこととする。

言語経歴：1958年9月 山口県長門市生 0  
歳～18歳 長門市 18歳～22歳  
山口市 22歳～24歳 神奈川県横  
浜市 24歳～ 東京都稲城市  
(東京都立大学大学院学生)

## 参考文献一覧

ここに掲げる参考文献は、本誌の意味論関係の論文において言及されたり、参考にされたりしているものを一括して、文献の編著者の五十音順に並べたものである。この他の多くの文献も参考にしているが、主なものを示した。御理解、御寛恕いただきたい。

- 池上嘉彦1975 『意味論』大修館書店  
 奥津敬一郎1967 「自動化・他動化および両極化転形——自・他動詞の対応——」『国語学』70  
 大野晋・柴田武編1977 『岩波講座日本語9 語彙と意味』岩波書店  
 影山太郎1980 『日英比較語彙の構造』松柏社  
 川本茂雄他編1979 『日本の言語学5 意味・語彙』大修館書店  
 吉林人民出版社1982 『漢日辞典』  
 金田一春彦・池田弥三郎編1978 『学研国語大辞典』学習研究社  
 国広哲弥1967 『構造的意味論』三省堂  
 ——1970 『意味の諸相』同上  
 ——1982 『意味論の方法』大修館書店  
 国広哲弥編1982 『ことばの意味3』平凡社  
 久野暉1973 『日本文法研究』大修館書店  
 見坊豪紀他編1982 『三省堂国語辞典第三版』三省堂  
 国立国語研究所1964 『分類語彙表』秀英出版  
 ——1971 『動詞・形容詞問題語用例集』同上  
 ——1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』同上  
 ——1972 『形容詞の意味・用法の記述的研究』同上  
 佐藤喜代治編1981～1983 『講座日本語の語彙』明治書院  
 柴田武編1976 『ことばの意味1』平凡社  
 ——編1979 『ことばの意味2』同上  
 尚学図書編1982 『国語大辞典』小学館  
 商務印書館1973 『現代漢語辞典』  
 新村出1983 『広辞苑第三版』岩波書店  
 杉本武1979 「まわる・めぐる」『日本語研究』2  
 鈴木棠三・広田栄太郎1956 『故事ことわざ辞典』東京堂  
 寺村秀男1982 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』くろしお出版  
 東條操編1951 『全国方言辞典』東京堂  
 徳川宗賢・宮島達夫1972 『類義語辞典』東京堂  
 中本ゼミ編1978 『日本語研究』1 東京都立大学国語学研究室  
 中本正智1981 『日本語の原景』金鶏社  
 成田徹男1979 「動詞の意味と格——「移動」に関する動詞を中心に——」『人文学報』132 東京都立大学  
 西尾実他編1979 『岩波国語辞典第三版』岩波書店  
 日本語研究会編1979 『日本語研究』2 東京都立大学国語学研究室  
 ——編1980 『日本語研究』3 同上  
 ——編1981 『日本語研究』4 同上  
 ——編1982 『日本語研究』5 同上  
 ——編1983 『日本語研究』6 同上  
 日本大辞典刊行会1972～1976 『日本国語大辞典』小学館  
 畑美義1952 『上伊那方言集』  
 服部四郎1960 『言語学の方法』岩波書店  
 ——1968 『英語基礎語彙の研究』三省堂  
 平山輝男編1979 『全国方言基礎語彙の研究序説』明治書院  
 文化庁1975 『外国人のための基本語用例辞典第二版』大蔵省印刷局  
 森田良行1977 『基礎日本語1』角川書店  
 ——1980 『基礎日本語2』同上  
 山田忠夫他編1981 『新明解国語辞典第三版』三省堂